



障害をもつ幼児の保育(30)

—この子と出会ったとき—

津守

真 (M)

津守

房江 (F)

この子と生きるついで大切に生きてきたこと(2)

ありのままを見て、深く理解すること

F 子どもと生きる中では、いろいろの出来事が起

こつてきます。

大人の目で見ても、よいこともあれば、困ることもあ

ります。予測出来ることから、思いがけないことまで

あります。どのように受け取ったらいいいのでしょうか。

か。



M 毎朝、私は、新しい日に出会って、昨日とは違う子どもの姿に驚くのです。私はその驚きを子どもと共有することが、受け入れることの出発点だと思っています。

F それは子どもの考えを理解する以前のことですね。

M そう、最初は理解しないまま驚いて、そのことをいつもの自分のやり方で対処しようとするけれど、それではうまくいかなくて思い直して見るのです。すると子どもが自分から始めたことには意味があるという基本の考えに、たどり着くのです。

F 受容とは、よいことも困ったことも受け入れるこ

とだと言われますが、受け入れるだけでは甘やかすことにならないか、という質問を受けますが……。

M ありのままの子どもを見て、外から見える出来事だけでなく、そのとき子どもが考えていることや、感じていることを深く理解することだと、私は思っています。

F そうすると子どものやることを、大人の価値基準でよいこととか、困ったこととか評価して見るという見方を越えることになりませぬ。

M 子どもの内面にあるものを、理解しようとすることは時間がかかりますが、子どもと出会うことが、とても楽しくなってくるのですよ。

自分を作り上げることに

— 生懸命な子どもたち

F 子どもたちは一人一人自分を作り上げることに真剣に立ち向かっています。子どもは困難に出会いなが

ら、小さな成長のひとつひとつを、元気に成し遂げてきています。その明るい真剣さが私たち大人の心をとらえるのですね。

M 私はこの二〇年間愛育学園で、一人一人の子どもと関わってきました。ある期間はほとんど毎日、いまは毎週二日ずつです。子どもの行為の中にその子どもの悩みや戦いがあることを思い、それが何であるかを考えようとしてきたのです。答えはその場では出て来ない事も多かったですけれど、その子自身が自分を作り上げる道を探求していたといえます。その子たちの人生のひとつままとして、『現在の形成』に役だっていると思うんです。そんなことを言うと思いがっているようにだけども……。

F 子どもが自分を作り上げることには一生懸命な時は、問題がなく円満に行っている時とは限りません。むしろ問題になるようなことをしたり、躓いたりします。その時子どもの成長期を見守っていた母親たち

も、人生の大事なことを学んできたでしょう。

M ええ、母親は勿論のこと、何よりも保育をしてきた私自身にとって、私の人生を作るのに欠くことの出来ないものを学びました。

M子さんの成長に触れて

M 三年位前のことですが、一日の終わりにM子さんが描きかけた絵を私は庭で見つけました。それを私は拾ってきてトランポリンの上におきました。実習生が絵の具を出してきてくれて、この子は指に絵の具をつけて空を描き、手を洗いにいって、赤い実を描いて、また手を洗いにいき、何度も行ったり来たりしながら、絵を完成させました。

この子はとても気に入ったようで、トランポリンの上にこの絵をおいて長い時間見ていました。私はこの子の一生懸命にやったことと、その後の満足そうな様子に、昨日とは違う今日があること、これからどんな

ことが発展するのか、私も新しく気合を入れてやろう
と思ったことを心に刻み、記録にも書きました。この
ような立派な絵を描くことはだれからも受け入れられ
やすいことですが、そうばかりではないことも起きて
きます。

F それから三年位みんなが気合を入れて関わった
ま現在、M子さんの様子はどんなですか。

M 最近私の心に深く残ったことがありました。この
子が庭で亀をいじっていました。亀が容器の縁から
逃げ出そうとしていました。それを見ているうち、私
は以前にこの子と幼稚園に遊びに行った時のことを思
い出しました。幼稚園ではモルモットを籠に入れて
飼っていました。M子さんはその籠に手を入れて外に
出してしまいました。幼稚園の子にはいじらせないけ
れど、この子には特別に許してもらっていました。私
は内心ハラハラしてとても気兼ねをしていました。
私が周りに気を使っていることは、子どもには伝わっ

たことでしょう。私は周りに気を使うそんな自分を嫌
だと思ってきました。

亀と遊んだこの日は養護学校の庭ですから、私も気
が楽ですけれど、亀を容器の外に出す時には『ちよつ
と待って』と言いましたよ。でもM子さん
がどうするか見ていると思って、自分をおさえまし
た。M子さんとやり取りしながらそばにいます。この
子は自分で気を付けながらやっている様子が分かりま
す。亀との関わりはとても自由で、だんだんと自然な
ものに変わってきたようです。後で気が付くと亀の遊
びは二時間も続いていました。

お迎えがくると担任の先生に足を洗ってもらって、
すっきりとして帰って行ったのです。

F M子さんはモルモットとか亀とかを迫力を持って
触ろうとしたけれど、次第に相手のことを考えるよう
になっていたのですね。

M ええ、その通りです。そのことに私はとても希望

を持つて感じたのです。大人が注意したり、教えたりしなくても、思うようにやっているうちに、子どもは自制してやるようになるのです。目立たない出来事だけれど大事なことですな。

保育者は自分の心と向き合う

F これはあなたが子どもと関わって得た保育の知でしょう。いつもあなたが言われるように、外側から見ただ一方的事実とは違いますね。

M そう、子どもの内面に目を向け、体の動きや心の動きも見えてきて、そこで得た洞察を持って新しく子どもに関わるのです。

F 子どもだけでなく、自分自身も見えてくるのではないですか。

M 私は自分自身が子どもに向かつて心を開いているかどうか、その時の驚きや、戸惑い、疑問、それから、好奇心、興味、楽しさなどを、素直に受け止めて

いるか自分を顧みてみます。大人はいろんな過去の記憶が心に浮かび、そのことも向かい合わなければならなくなるでしょう。保育者は自分の行為を受け入れるだけでなく、その時の自分の心の状態を肯定し、新しく考え直す。自分の固定観念、常識を破って新しい自分に出会います。あるいはまたこんなことをやる自分を嫌だと思う。でも保育の中で同じようなことに何度も出会うから、より多面的に見ることが出来て『立体的な知』になります。途中で性急に判断し過ぎることは危険です。

F あなたはそのような省察を保育中にするのですか、それとも保育後にするのですか。

M どちらもありますよ。保育中の省察はどちらからかといえば夢中でやっているから無意識が強くて、保育後の省察は意識的で知的だと思います。そのどちらも大切にしたいですね。

(保育研究者)